たかさご史話⑦

～一揆の情報～

江戸時代の高砂は、加古川河口の港町として繁栄していましたので、諸国の廻船が寄港し、また奥播磨や丹波とも舟運で結ばれていました。また高砂の商人は全国各地と取引していましたので、各地の情報が高砂に集まり、また高砂の情報も各地に発信されていました。それゆえ高砂市史を編集するに当たっては、市域の史料だけでなく、高砂と取引のあった全国各地の史料を調査する必要があると言えます。ここで紹介する史料もその一つです。

京都大学法学部の図書館に『播州表百姓一揆大騒動之一件』という表題の薄い冊子があります。その冒頭に「播州高砂より九月十六日出為知状之写」、中程に「九月二十五日出十月五日着追書ニ申来之写」と記されていて、高砂から発信された手紙の写しであることが分かります。

内容は天保四年（一八三三）九月十二日から十五日にかけて加古川筋で起きた大規模な一揆の様子を知らせたもので、高砂は姫路藩の治安部隊一五〇〇人が出動してきたために被害を免れましたが、「珍しき」「恐ろしき」大騒動であったと記されていて、かなり衝撃的な事件であったようです。この史料は差出人も宛て先も不明ですので、手紙を装った風聞書の可能性もありますが、一揆勢が押し寄せてくるという情報をうけた浜側の諸商人・諸問屋や内町の大家が残らず家財を船に積んで沖に出し、女子供は漁師・農家に避難させ、男だけが残って十五日まで三夜とも眠らず待機していたことなど、高砂町人でなければ分からない内容が含まれていますので、恐らく高砂から江戸か、北国かの知人に宛てて出された手紙が、珍しい大事件の貴重な情報として転写され、多くの人々に読まれたものと推測されます。

（高砂市史編さん専門委員長　今井修平）